

名所図会類の風景描写

板坂, 耀子
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/12135>

出版情報 : 語文研究. 38, pp.16-26, 1975-01-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



名所図会類の風景描写

板坂耀子

名所図会に関する説明は、

「安永九年、秋里舜福（籬島、又は湘夕）が『都名所図会』を著はし、京都の神社仏閣よりはじめて山川丘陵まで、苟くも名所と名のつく場所の沿革や風景などを叙述したが、その筆は平易暢達、その挿絵は軽快瀟洒、その体裁は娯楽的で、而も地誌案内記を兼ねてゐた（中略）その盛んに読まれた結果は、秋里舜福をして更に他国の名所図会に指を染めしめたばかりでなく、これに倣つて同類の著作を試むるものが続出することとなり」

（日本文学大辞典）

「名所図会は、三つの柱からできていた。一つは挿絵。第二は道中或いは名所の説明。第三は名所歌である。挿絵は絵師の受持だから別として、第二の説明文は、道中記、名所記、先行の紀行文その他の文献を按配すれば、居ながらにして書き上げえられるものである。第三の名所歌は和歌のみならず著名な漢

詩や発句を併載したのが目新しいといえはいいえるが、要するに旧来の名所歌集の転載である。籬島が各地方の名所図会を続々と編纂上梓しえたのは、かれが大旅行家だったからではなく、机上での著述を容易になしえられたからに他ならない。つまり名所図会は実際に旅行する人のための手引きではなくして、かえつて旅行せぬ人のために書かれたといつてよいのである。」

（鈴木裳三氏「近世紀行文芸ノート」）

等で、ほぼつくされていよう。私が、特にこの名所図会類の風景描写に注目する理由を説明しておきたい。

名所図会は多くの点で近世紀行文と近似する。一般に考えられるより、その境界はずつとあいまいである。近世の紀行文の中には、内容において、名所図会とほとんど変わらない雑多な内容を含み、作者の影が薄いものがある一方、名所図会のいくつかは、部分的にはあるが作者が登場し、一人称で旅の様子を記して、紀行文と同様の体裁をとる。

だが、基本的には、紀行文の大半が、不特定多数の読者を持たず、個人的な慰みとして記されたのにひきかえ、名所図会は、

発生当初から婦女子も含む多くの読者を予想して書かれ、含むところの内容は、時に文学と呼ぶのをためらわせるほど種々雑多な、土地に関する伝説、名物、風俗等の知識の集大成である。そして、何よりの特徴として、おびただしい図会を持ち、それと平行して文章が進む。

もし、このような作品類に風景描写が登場するとしたら、それはどのようなものになるだろうか。多くの婦女子の読者を持つ以上、何らかの平明さが要求されようし、従来紀行文には登場しなかつた雑多な記事との調和も考慮されねばなるまい。図会が描かれている以上、近世紀行に多出する「絵にか、まほし」の類の表現はもとより、図会で見てとれる事実を記すのは蛇足であろうから、何か視覚以外の独自の表現が、必要とされるかもしれない。近世紀行の風景描写にないものを、そこに発見できないだろうか。

近世紀行文学が、中世以前のそれと比して、さほど新しい発展を見せず、新鮮味に乏しいということは、しばしば指摘される点である。それはとりわけ、風景描写に著しい。

第一に、題材の開発がほとんどいいほど、なされてない。

「今日行ハ坂道も少しあれと左右うち晴て、水の流も所ところに有て（中略）あらし山を思ひ出らる、気色也。昔の人の哥枕にせし名所といへと、ミおとりする所もあり。又さのミ名高き所にしもあらねと此所などはすぐれたる眺望也。」（清源院軌子紀行）

のように、従来名所とされ、美景とされていた土地以外にも

それに劣らぬ美景はあるという叙述は、近世紀行にままみられる。しかし、それはあくまで従来名所・美景を基準にした上での発見であり、評価であるにすぎない。それまでの紀行類が美しいと見なかつた場所の中に美を見出し、それを描写するという試みはなされてない。もちろん、それを行うには、美についての自分独自の評価基準を持つことが必要なのであって、そのような段階として、従来名所を批判したり、名所の魅力欠点を分析したり、自分自身の風景の好みについて云々したりすることはしばしば見られる。

「昔時よりも丹州天の橋立、芸州厳島、この松島とを称して本朝の三景とす。予愚眼なるかはしらず、所詮橋立、厳島杯を並べ論すべき松島に非ず。」（東遊雜記^{註5}）

「我おろかなる身なれど、水をこのめるくせありて、いつも海のがめこそたのしけれとのみ思へば、山路はくるしきばかりにめとまることはなかりけるに。」（旅の命毛^{註6}）

「山中に狩野古法眼が筆捨山といふあり（中略）いにしへは画家もいと拙かりしにや、うつしがたきといふ山にもあらずかし。」（霧旅漫録^{註7}）

しかし、少くとも近世紀行全体において、美景と称えられたのは、中世以前と同様の桜・紅葉の名所、海辺、山寺、等であり、描く対象そのものが、すでに共通していた。そして対象を観察し、表現する手法も、紀行文の発生当時の「土左日記」「更級日記」のそれと、ほとんど変化はないのである。

「眼前の湖は藍をすりたるやうなるを——」（旅の命毛^{註8}）
「白波打寄せて碎散る様、卯の花垣の風に飄るが如し。」

「水上を見やれば白絹に包みたらんやうなり。」（「常陸帯」^{註8}）
（「道老の」^{註9}）

身の回りの、比較的優美な事物をもって、風景の状態にたとえようとする手法は、昔ながらのものにすぎぬし、たとえ方に
も斬新さはない。

もちろん、芭蕉の「松島は笑うが如く、きさがたは恨がごとし」のように、自らの印象を巧みに折りこんだ描写も存在するし、同じ比況にしても、細かい工夫をこらす例もあるが、これらはむしろ例外といつていい。大多数の紀行文は、風景描写においては、先のような例の他には、

「前は巨溟天を浸して波濤ひゞき後は山にして烟樹深し。」

（「三浦紀行」^{註11}）

等の漢文調の美文を連ねるか、

「音に聞しよりは猶勝りて景よきこと、筆にも絵にも中々に及ばじ。」（「丁未旅行記」^{註12}）

「今朝に変わり白雪の上に富士の高根、鹿子まだらの雪を戴きて現る、は、又絵にも写さまほし。」（「常陸帯」^{註13}）

「指を立てたらん如き巖多くて、嶺のよそめなど、絵にしもまだ見知らぬさまなり。」（「伊香保の道ゆきぶり」^{註13}）

と、「絵にもか、まほし」の類の、はなはだ抽象的であいまいな感嘆文に逃避するのである。

この中で、描く対象や表現法は昔ながらのものであるが、それを他の部分の中にさりげなくとけこませて独自性を出そうとする試みが、特に、文学的完成を意図する紀行の中にしばしば

見られる。中島広足の作品などは、この点、すぐれたものといえよう。

「右のかたに松原の並立たるが、いとうつくしうはるかにみゆるを、人にとへば、あれなん住吉の浜なりといふ。なべてえならぬけしきどもなり。ここを過れば、わだのみさきとて、海の中までき、やかに、さし出たる松原あり。」（「春のかり」）

このようにして続いていく文中では、美景としてとり上げる題材や表現法が何ら新奇なものでなくても、他の叙述と一体化して、読者に一つのイメージを与える効果は充分にはたし、題材や表現の陳腐さが比較的目につかない。構成の工夫というべきかもしれぬ。しかし、これは所詮、「土左」「更級」等における風景描写のあらわれ方と同様であり、それらの作品の意識的な模倣にすぎない。紀行文に関する限り、風景描写は、構成の面でも、近世において新しいかたちを発見しえてはいない。紀行文にきわめて近い存在である名所図会類の中に、登場する多くの風景描写もまた、これらと同様であるか否か、確かめてみたかった。

二

いくつかの代表的な名所図会をほぼ時代順にとりあげつつ、そこにみられる風景描写の特徴について記していきたい。

名所図会流行の口火を切ったのは、いうまでもなく安永九年の秋里籬島作「都名所図会」である。籬島はこの後ひき続いて「大和名所図会」「摂津名所図会」「和泉名所図会」「近江名所図会」「東海道名所図会」「河内名所図会」「木曾路名所図

会」^{註14}等を記し、名所図会作家の代表的存在となった。

風景描写に関する限り、同じ名所図会の中でも差があり、著しく多い風景描写が登場するものと、皆無に近いものがある。籙島の作品中でも、たとえば「大和名所図会」には風景描写といえる部分は少なく、長い文章を費している部分はせいぜい三ヶ所ほどしかない。これに比し、「都名所図会」や「東海道名所図会」には、風景描写の部分は非常に多い^{註15}。

風景描写の部分は、いづれも他の部分とは比較的是つきり区別ができる。

「田村川 水源勢州古茂野の山中より流れて、松尾横田に会し、末は野洲川といふ。」

蟹坂 或説に、むかし此坂の嶮岨をたのんで山賊出で、旅人に暴逆せしより此名をよぶ。姦賊の横行より蟹坂といふ歟。又蟹が塔は、かの山賊を亡し、こゝに埋むならん。名物とて丸き蛤を売る家多し。(中略)

近勢国堺 沢村立場の入口に、近江・伊勢二州の封示あり。
鈴鹿山 阪路八町二十七曲、一名多津加美阪といふ。」

(「東海道名所図会」巻二)

このような記事の中に、次のような風景描写が登場してくる。「それ当山は松杉巖鬱として常に白雲横たはつて路を封ず。山頭巍々として旭日の出づる事遅し。靈泉は滾々と玉を注ぐが如く、堯の時、徳茂し清平なれば礼泉出づ。夏後の時、俊才官に在る時は則ち醴泉湧くといひしも、この醍醐水のたぐひなるべし。」(「都名所図会」下巻)

「されば此勝景を見れば清風花を動しては白雲を生じ蒼莓巖

を封しては冷水滴り幽邃閑寂にして遙に塵寰を隔つ。嘗て西行上人三とせの星霜をこゝに歴給ふ。真に香炉峯に結びし楽天が草室ともいひつべし。」(「大和名所図会」巻六)

漢文調や、故事の引用が目につく。美景の表現に中国の故事をひくのは近世紀行作家たちがよく用いる手法であるが、籙島も多用する。だが、その一方では、

「この地は常に寂寥として人跡まとはに、洛のつてもすくなく、春は漸く軒の梅かをり、庭の若草しげりあひ、青柳の糸風にもつれ、山藤松にかゝりて花橘匂ふ頃は時鳥音信れ、秋はいとゞ物淋しく、心のまゝにあらたる籙は、野辺より露しげく、虫の音鳴きつれる折——」^{註16}(「都名所図会」上巻)

「風景は東にへとぶ鳥の飛鳥里近く前には湖ハ瀬になる飛鳥川の年の浪発く立て春は曙やうく嶺の松かすみ軒の梅匂ひ鶯の初音清く西にハ石川の流涼しく夏はよる蜚飛かふ草の陰——」(「河内名所図会」巻三)

等、「平家物語」や「枕草子」の影響のうかがわれる文章も用いている。

このような文章が、はたして名所図会の読者層に充分理解され得たかは疑わしい。また、他の部分の記事との調和は、ほとんど考慮されていないかに見える。更に、これらの描写の中に図会の存在を計算している様子はない。

名所図会以外の作品類を見ても、籙島は器用な作家であり、当初はこれらの風景描写は、彼自身の文学趣味の発露であったとも考えられる。

「西ハ滄溟洋々として風景斜ならず。」

「西の方灘の浦々と泉紀の浦まで眸に遮りて風色斜ならず。」

「春は岩藤岩躑躅など咲ミだれて風景斜ならず。」

「麓の小田は綾織の如く鮮にして風光斜ならず。」（いずれも「撰津名所図会」）

「右の方に滝ありその源遙にして梢繁く鮮ならず、たゞ千尋の布を晒すが如し。」

「此辺の大飛泉にして樹林繁茂したる中より落て數百の布をさらすがごとく」（いずれも「木曾名所図会」）

の類の不用意な同一表現のくり返しは、いくらでも見出せるが、これだけ大量の書の中で、類似の美景を描いて、数多い描写を行わねばならないことを思えば、むしろ限られた表現をさまざまに変化させて工夫して用いている所に、彼の熱意と才能を読みとるべきかもしれない。その中には、

「此山の丹楓は（中略）散かたにハ坊舎の書院厨までみな紅にて人の顔も赤き面を被たるが如し」（「和泉名所図会」巻三）

などの生き生きとした観察や、

「繁花の地にして杜頭の賑ひ西の方を遙に見わたせばは市中の萬戸河口の帆ばしらさながら雲をつんぎくに似たり。殊に社檀近年再営ありて壯麗にしてきねが鼓の音鈴の音玲瓏たり。」

（「撰津名所図会」巻三）

のような人事の活写もある。冗漫で平板な描写も多いが、やはり風景描写においても、彼が名所図会の基礎を作ったといえよう。

「弥生の頃はさながら雲と見れば雪と散りて——」と桜の名

所を語り、「秋のすゑ紅錦の色をあらはし——」と紅葉の名所を表すたぐいの常套句は、名所図会ではよく使われ、作者が特に興味をひかれた景色以外は、これらの句を連ねただけの簡単な描写でおおることが多い。とりわけ、文化元年「播州名所図会」では、図会があるにもかかわらず、

「山下多く塩浜ありてまことに絵にかけるがごとし」

「大海又遠くして万船木の葉のごとく樹林人屋往々にむら／＼として実に画にかける如し」

と、「絵にかけるようなり」の常套句までが登場し、これはその後の名所図会類にも、しばしばあらわれてくる。

しかも一方で名所図会に風景描写は、必要なものともなっていたようである。享和三年刊の「二十四輩名所図会」は、作者の了貞が、自序で、自分は参拝先の寺しか記さないが、書肆が近在の名所の説明を挿入して本の売行をはかろうとし、自分もそれを納得した旨を記している。特に断わりはないが、一段小さく、行をかえて記してある部分が、おそらく書肆の行った名所の紹介と思われる。この名所図会中の風景描写は、いずれもその部分から抽出せられる。

このような事実を、風景描写が作者の趣味にとどまらず、読者や書肆に要求される面もあることを予想させ、それだけに、作者の表現が無気力な画一化となっていくことも推測される。事実、名所図会の風景描写は、最もすぐれたものでも、やはり類型的な文章という印象を与え、籬島に関する個所で述べたこととく、その類型的表現が、手をかえ品をかえて自由自在に駆使されるところに、面白さも工夫も存するのである。しかし、だ

からといって、作者たちがこれらの描写を全く無責任に空想のみに基いて行つていたともいいがたい。文化二年「唐土名勝図会」の風景描写は、見ない唐土の風景を描いて、他の名所図会に比べて著しく抽象的で精密さに欠ける。それと比する時、名所図会類の一見常套的な描写も、やはり実地の旅と、眼前の風景の観察に基いて行っているのではないかと思われる。たとえ既成の表現や語句をくみあわせているにすぎなくても、名所図会の風景描写には、見ないものを見たようにつなぎあわせるごちなさは、多くの場合、まったく見られない。

文政六年「鹿島名所図会」は二冊のみのせいもあって、目だつた風景描写はないが、天保七年刊「江戸名所図会」は、籬島を思わせる多彩な表現で、多くの風景描写を行つている。ただ、籬島の文より一層平明で、故事の引用は比較にならぬほど減少している。

天保八年刊高市志友作「紀伊国名所図会」も、十七冊という大部の故もあつて多くの風景描写を含んでいる。文章はやや生硬で、単なる美文でなく、説明を加えようとすることが多い。滝に関する描写で、籬島が音無の滝に用いたと同一の文章をそつくり使用している個所が二ヶ所ある。このようなことは、私が見る限り、名所図会では他に例がなく、この名所図会の性格には、なお検討を要する。

天保十三年の「巖島名所図会」も

「この辺を大仏の原と称して地漸く広く花木多し弥生のころは甞哥の遊客花顔雪肌のを率る来りて春色をもてあそぶ。」

「幽遠清閑にして澗水の音のみ潺々として石上を奔れり岸の両辺にハ楓樹多く秋されば紅錦を曝すが如し。」

などと平凡な筆致で、故事の引用は少い。しかし中には、

「張りおつる瀑布のさまざまことに白糸を乱せるか如し(中略)夏月螢火多くしておちくる水の縦横にちりまがひ恰も小文の織細に似たり。」

のように、いささかの工夫も見える。籬島の作品のような気負いは感じられないが、描写は手なれて、無理がない。

これに比して嘉永二年、豊田利忠作「善光寺道名所図会」は

「抑姨捨山は山の姿高からず低からず旧にし木立もあらざれば四方の詠も餘所ならず(中略)此所彼処の芝生にむしろを延詩を賦し歌を詠じ野風炉所々にけぶりつ、問て笑ひ答て咲ひ時打をも物かハに笑ひてハ——」

「此所より北東を遙に眺ればまづ浅間山半は雲に隠ひて立昇る煙も見えず裾野は東に遠く流れて末をしらず(中略)千隈川ハ眼下に驚を繞り人里は所々に麦の島黄ばみわたり木立青く茂りて鮮なる風色也。」

などと、対句を利用した軽快な調子の中に、故事や名所と無関係な清新な描写を行つている。その後の晚鐘成作の「金比羅参詣名所図会」「西国三十三所名所図会」(いずれも嘉永六年)等になると、

「二王門を入左右桜の並木列れり晩春の頃ハ花爛熳として美観なり。」

「此山峰高く谷深く花木雲水絶勝にして四時の風景美観なり。」
「往道ハ緑の影滋く左ハ海上遙かにして際もなし所謂風景の

地也。」(いずれも「西国三十三所名所図会」)

と、半ば決まり文句と化したかのような文章で簡明な美景の説明を行う一方で、

「参詣の道條にハ此地の名産として左右の家毎に木綿糸の組紐打紐種々の染色うつくしく太きあり細きあり又真田織ハ一重帯袋織箱掛上括に至るまで彩糸を雜へて縞をなし所せきまでに並べたて旅人に進む尚小倉織の帯地をも織出せり何れも奇麗にして家土産にハ能品なれば求むる人多し故に至つてにぎハしき船着なり」(「金比羅参詣名所図会」巻一)

のように、これまで見られなかった新しい題材をとり上げはじめ。道の両側の土産物を、名所図会が伝統的に守つてきた語調のよさを保ちながら具体的に活写している、このような描写は紀行文も含めて、近世の風景描写中、数少ないものであり、平明さと新鮮さを兼ね備えて美しい。これに限らず、人事に関する巧みな描写は、晚鐘成の作品によく見られ、彼はそれに、力を注いでいるようである。

同時代の松岡信正作「讃岐名所図会」は、

「羽立山羽立峠につゞき北海漫々として松原ハ海湾にさし出たり前ハ播磨の大洋を見わたし東にハ淡路しま遙なり此松原の深き白砂磯嶺松沙かぜに時雨の音をそへ通行の駭客詩哥等少からず他郷の人ハ長尾寺より爰に來り松原を見物すべし」

「此所は北にさし出たる海岸にて東ハ鳴戸淡路嶋北は播磨路の諸山の眺望いはん方なしかつ奇石多く黒岩大岩白岩八疊岩などいへる巖あり林泉におくべき石も数多あれども官よりミダリにとる事をゆるさず」

などと、単に客観的な風景描写でなく、案内記としての性格を強く含ませている。このような描写では、もはやそれほど他の記事との異和感がない。風景描写が名所図会全体の中に自然に組みこまれて自らの位置を定めている。

安政五年「成田名所図会」には風景描写がほとんどないが、天保十五年に前編を出し、明治十三年に後編を出した「尾張名所図会」には多くの風景描写が登場する。その中にはたとえ「当社ハ頗大社にして(中略)分明清朗の一勝聚なることハ図を見て知るべし」

「堂上より下瞰すれば松杉の古樹俯して梢を見(中略)当山ハ如來山と双峯兩立程ちかければ如來山の記及び画図にゆづりて畧しぬ」

と、画図との一体化を示す文章や、

「此藤一根にして僅に百年前後のものなるが培養に力を尽して架棚の広さ縦横廿五間四面猶その蕃延の余蔓別に六間餘の瘤架あり九そ棚の高さ二間斗りにして花の長さ四五尺より一間程にも及びり暮春の頃開花架にミつる時ハ白日にも寸天を見ずこれを仰げバさながら紫雲の蔽へるが如く又織女の天機もこれには及べじと思はる実にかゝる広大なる藤架ハ皇国ハ素より海外にも又古今にも絶て聞ざる壯觀なり故に遠近より日ごとに來堂する人幾百千といふ事を知らず」

と、具体的な説明と誇張された表現を巧みに統一した描写などがある。先の、故事や名所を無視して、人事や平凡な情景を活写する、あるいは、そのような描写の中に、名所の新しい魅力を発見していく傾向とともに、これらの描写は、名所図会の

他の部分における、実用的具体的な案内記風の記事や画図との融合の中に、従来の常套的な美文の特質を生かしながら、一種の客観性を帯びた、新しい描写を生み出していく傾向であるといつてもいいだろう。

当然のことながら、これらの作品にはおしなべて人事の描写が多く、故事の引用は減少する。これは文久二年「都名所図会」の補充を志して書かれた「花洛名勝図会」でも同様である。序で断わっている通り、籬島の文章をそのまま用いることもあるものの、それらの名所に集う遊客たちの生態を描き、それを附して、新しい風物詩としてまとめている。

三

このように見てくると、名所図会の風景描写が、当初の長い美文調を次第に要領よくまとめて圧縮し、美文を一種の符牒として利用し、用いながら、その一方で、従来とり入れられてなかった数字や固有名詞の多用、案内記的要素の加入等によって新しい風景描写を生み出していつているのがわかる。人事の描写が増加する一方で、故事の引用が減っているのも、作者たちの工夫を示すであろう。

このような発展が、最初から意図的に追求されたものではなく、むしろ作品全体の統一を無視して、他の部分とそぐわない風景描写の美文を書きつらねることからはじまっているのを、私は興味深く思う。

名所図会はいうまでもなく、事実の伝達を主目的とする作品群であり、それ故にこそ、ある場所が美景であることを示すた

めには、他の部分とちぐはぐであっても、委細かまわず典型的な美文が使用されたものと思う。作者の文学的欲求もさることながら、名所図会の風景描写には、そのような実用的な面がたしかにあった。結果としてそれが、集中的な風景描写の繰返しをよび、その古さ、陳腐さに正面からたちむかわせた。数しれない陳腐な美文の繰返しの中から、かえってその長所を——うけいれやすい語調のよき、平明な象徴的表現を生かしたままで、新しい題材をとり入れていく試みが生まれる。暁鐘成の作品類の人事の描写などはまさにそれであろう。また一方ではいわば非文学的な他の部分とある程度の一体化が進むにつれて、文学的な紀行文がとりいれえなかつた雑多な要素を含む風景描写が生まれた。「讃岐名所図会」や、「尾張名所図会」には、それらがあらわれている。

紀行文作家たちには、これだけ多数の試みや実験を風景描写において繰返すことは許されていなかった。したがって、芭蕉や土屋妻子や広足が、いかに表現に心を砕き、すぐれた風景描写を行ったとしても、それは、あるいは微妙で新鮮で、繊細であるかもしれないが、名所図会の風景描写が到達したように、多くの人々にうけいれられやすい、昔ながらの美文を生かした、いい意味での平凡さを、とり入れることができていない。また、雑多な要素を加えて効果をあげることも、充分には行えずにいる。

もし、紀行文において、名所図会の風景描写に最も近いものを生むことができるとしたら、それは芭蕉らとは異つた紀行文観を持ち、それに従つて紀行文を記したと思える人々の作品類

であろう。

芭蕉をはじめとする、俳人、歌人たちの多くは、紀行文を記すにあたって、やはり紀行文というものに対する一つのイメージを抱いている。それは「笈の小文」冒頭で芭蕉が述べた有名な一文に見るように「土左日記」「海道記」をはじめとする伝統的な紀行文の延長線上にあるものであり、後に去来の「伊勢紀行」を芭蕉が評して、

「ひとたび噲じて感を起し、二たび誦して成をわする。三たびよみて其無事なる事を覚ゆ。此人や此道にいたれりつくせり。」^{註18}
と言っているごとく、あくまで一つの文学作品としての完成をめざすものであった。

このような紀行文作家としての姿勢は、作者が、多彩で複雑な題材を、充分にとりこんで文学作品として処理する力量を持っていた場合は、問題なく、すぐれた作品を生むことにつながる。しかしまた、このような意識は、作者を襲う豊かな現実が、作者の文学者としての能力を越えていた場合にはかえって作者を束縛し、限界となつて作用する。自らの文学作品としての紀行文の完成に役だつものだけを、旅の体験の中から拾いあげようとする間に、結局、最も興味深い記事を、とりおとす結果ともなる。

近世紀行の大半が、中世以前の紀行の模倣から脱しきれずにいるのは、このためとも思われるが、それらの凡作に限らず、芭蕉や広足のような、文学作品としてすぐれた紀行文を読んでも、共通のものたりなき、もどかしさを感じることもある。それらは彼らによつて作り上げられ整理しあげられた旅の記録で

あり、文学作品としては完成しているが、より雑多で複雑な体験や記事が、その背後にあつたはずであり、それをこそ見たいという欲求にかられることがある。芭蕉らの紀行文観は、結局「土左」から「海道記」「東関紀行」などにいたる紀行文を理想としており、それに組みこめない記事は切りすてられていると見なければならぬ。またその一方、彼らは従来の紀行文の徹底的な模倣はつしんで、陳腐な表現はさける。あくまで自らの文学作品を記そうとする、作家としての良心を捨てない。

ところが、近世紀行文には、これとちがつたもう一つの評価基準が存在する。それは仮名草子時代、名所記をはじめとする実用的な紀行類が利用されたことの名残りであろうが、紀行における情報伝達の役割を重視し、どれだけ豊富かつ正確な記述がなされているかを注目する傾向である。

「江漢司馬先生著 畫図西遊譚 全部五冊 関西の紀行にして東海道五畿中国九州木曾路等、先生遊歴の地名山靈江河海浜勝地佳境に過ては、悉く真景の図画を交へ、種々の奇話珍説等、見聞に随て平がなを以て面白記す。且和蘭清商の館中、平戸鯨漁など珍しき事を審に書とりたる面白き書なり。」（文化九年刊「紀伊國名所図会」巻三、末尾広告）

のような広告文からもそれはうかがえるし、「東西遊記」の伴蒿蹊の序は、

「中頃に、能因西行の両法師などこそ、けしかるさかひへも執行せられぬと聞ゆれど、紀行こまやかならず。後には宗祇法師あれど、是も名だゝる所計をあら／＼するされたれば、其けしきさへ明らかならず。まして風土人情をや。わづかに熊野山

中の小児が米をしらず、越路の雪に妖怪のあらはれしなどいへるたぐひのみで、僻境のおもむきをするのよしにはありける」と、はっきり知的興味による紀行文学評を行なつて、中世のいわば文学的紀行を斥けている。このような紀行文学観もまたあったのであり、長久保赤水、古河古松軒、菅江真澄、司馬江漢らの作品が、これらによるものといつてよいだろう。彼らの作品にはおしなべて感傷性が稀薄で、物語性にも乏しく、地誌的 성격が強い。文章は平明で、客観的である。

彼らは全体の調和には無関心で、見聞した事実のみを虚心に並べていく。もしそこに取捨選択がなされるとすれば、それは面白いかどうか、実用的かどうかということであつて、古い紀行文の味わいと近いかどうかということではない。

このような作品類の風景描写は、名所図会のもれと共通する他の部分とそぐわない常套的な美文であることが多い。

「溪水岩の間を飛び流れ誠に畫の如し。比は秋なれば、紅葉錦の如し」(『江漢西遊日記』卷二)

「ひし／＼と立る大岩のすかたはもろこし大湖に名た、るうつし画に見たらんにひとしう、あふき見れば、三芳野のこかねのみたけをわけのほるにことならず」(菅江真澄「しげき山本」)

「白砂のしろ／＼とせし広き街道に並松の大樹繁茂し、木の間／＼に海づらも見へ渡り風景筆に尽しがたし」(古河古松軒「西遊雜記」)

彼らは、このような型通りの風景描写によつて、雑多な記事の多い自らの作品に少しでも文学的価値を添えようとしたのか。また、自らの文学趣味の発露をそこに求めたのか。それもなか

つたとは言えぬ。だが、それよりも、名所図会の場合と同様に情報の記録と伝達を第一の目的として紀行文を記した彼らが、ある場所が美景であるという事実を最も正確に平明に記そうとするとき、考えられる風景描写の手法はこれしかなかったのだとも言える。伝統的な紀行文の型を踏襲してすぐれた作品を生もうという意識が特になかった彼らが、およそ風雅な旅行記にはあられをそうにない雑多な記事を平然と記した、その同じ意識が、一方では美景を描くのに、陳腐で使いふるされた文章を平気で使用させるのだともいえる。

だが、彼らにしたところで、名所図会の場合ほど、同種の風景描写をくり返し、無意識の試行錯誤をくり返す機会に恵まれていたわけではなかった。名所図会が、冊数、部数ともに大量であり、一作品中で、名所といえは、必ず風景描写を行わなければならないことを思うと、これらの紀行文作家たちの作品に登場する風景描写の量はその比でない。しかも、名所図会のように、前作の成果を継承していくことを、これらの紀行文作家たちは充分意識していなかった。

名所図会が、不十分ながら一応の到達を見せた、常套的な美文の読みやすさを保つて大衆性を備えつつも、具体的な観察や案内記的要素をも総合して、新しい題材を消化していく風景描写は、近世の紀行文には結局、あらわれないままである。近世末期の紀行文の傑作は、むしろ松浦竹四郎のそのように、全く風景描写を排除した作品類の中に見出される。紀行文の風景描写は、きわだつた個性的才能のひらめきか、昔ながらの無難な和文のくり返しにとどまり、多くの人に喜ばれ、作者の意欲

をもやさせるものとは、なりえないままだった。

名所図会がこの点において紀行文よりも成功をおさめたのは、当初の、秋里籬島における、豊かな常套的美文の流入、名所といえは否応なしに風景描写をくり返さねばならなかった経験の蓄積、作者たちの実体験にもとづく観察眼と、幅広い読者層への配慮、それに、名所図会他の部分における雑多な要素の風景描写への混入、等によるであろう。何よりも情報伝達と娯楽性を主とする名所図会の性格そのものに負うところが大きい。

名所図会は、明治に入っても制作刊行されている。しかし、明治以後の名所図会において風景描写がどのような変化発展をとげたかは、私はまだ見ていない。

註

- 1 貝原益軒の作品など。
- 2 「善光寺道名所図会」「木曾路名所図会」など。
- 3 各名所図会の序文や凡例に、婦女子を考慮した旨を記すことが多い。
- 4 日本古典文学大系月報、中村幸彦先生「近世の自伝文学」など。
- 5 古河古松軒、天明八年。
- 6 土屋婁子。
- 7 瀧澤馬琴、享和二年。

8 安東朴翁、元禄十一年。

9 成島和鼎、安永五年。

10 「旅の命毛」など、かなり工夫した描写も登場する。

11 一鶴堂白英。

12 池田綱政、寛文七年。

13 俵文字。

14 この中には、たとえば「近江名所図会」が「伊勢参宮名所図会」と「木曾路名所図会」をつなぎあわせたものにすぎないなど、書誌的に問題のあるものがある。それらについてはこの論では述べる余裕がなかった。

15 私が採取した風景描写と見られる部分は「都名所図会」34ヶ所、「東海道名所図会」25ヶ所、「江戸名所図会」66ヶ所、「紀伊國名所図会」76ヶ所などである。これらは、近世の紀行文と比して、かなり多いといっている。よほど意識的に美文を連ねた作品でない限り、近世紀行文の風景描写は一作品中にはそれほど多くあらわれない。

16 寂光院の描写である。

17 「抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の文をふるひ情をつくしてより、余は皆佛似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅知短才の筆に及べくもあらず。」

18 「伊勢紀行」跋。